

<報告・記録>

## 金田晋先生東亜大学名誉教授就任に寄せて

清 永 修 全

東亜大学 芸術学部 アート・デザイン学科  
kiyonaga@toua-u.ac.jp

### 《要 旨》

2025年5月21日、多年に亘って東亜大学大学院研究科長を務めてこられた金田晋先生に名誉教授号が授与された。9月16日には有志による記念祝賀会も実施されている。本エッセイは、個人的な追想も交えつつ、金田先生のこれまでの足跡を振り返り、その功績を讃えるものである。

キーワード：金田晋，東亜大学，大学院，芸術学部，広島大学，美学，現象学，現象学的美学，環境，暦，旧暦

### 1. はじめに

2025年3月31日をもって金田晋先生が東亜大学を退官された。そのしばらく後の5月21日、それまでの多年に亘る本学に対する貢献が評価され、名誉教授号が授与されることになった。先生は、2001年に東亜大学総合人間・文化学部教授・同学部長として着任されて以来、ほぼ四半世紀に亘り本学とともに歩んでこられたことになる。激動の時代であったに違いない。そこで、同僚として、そしてまたかつての指導学生として、ささやかながら学恩に感謝し、その労をねぎらい、功績を讃えたいと思う。

### 2. 略歴

まず以下に、金田先生の略歴を確認しておきたい。

金田先生は、昭和13年（1938年）大阪の堺市にお生まれである。昭和44年（1969年）に東京大学大学院人文科学研究科美学美術史専修課程博士課程を単位取得満期退学されると、同

時に広島大学教養部に専任講師として着任。そして、同大学総合科学部助教授、教授を歴任されたのち、平成13年（2001年）6月に、東亜大学総合人間・文化学部教授ならびに初代学部長として同学部の創設に関わり、その発展に尽力された。その後、平成22年（2010年）に、新たに東亜大学大学院特任教授として就任されると、以後、大学院総合学術研究科研究科長として2024年度末に至るまで大学院の統括に手腕を振るわれるとともに、同大学院の教育制度の確立と教育活動の充実、質向上に精力的に取り組みされてきた。同時に、学校法人東亜大学学園評議員・学校法人東亜大学学園理事として、本学の運営にも大きく尽力されている。

研究においては、何より本邦を代表する現象学的美学の研究者として、美学・美術理論・芸術学領域において多大な功績を残され、美学会会員、芸術学関連学会連合委員、日本現象学会代表委員、広島芸術学会会長、第15回国際美学会議組織委員会委員・アジア部会長を歴任されたほか、『絵画美の構造』（勁草書房1974年）、『芸術作品の現象学』（世界書院1990年）、『芸術学の100年』（編著、勁草書房、2000年）、『環境を美学する』（溪水社2024年）といった

著作をはじめ、美術年鑑『美術ひろしま』の第3巻から10巻にわたって連載された「戦後ひろしま美術年譜 1945 - 1983」を執筆されるなど、おびただしい研究成果を挙げられている。

また、社会活動においても目覚ましい業績を残されている。平成元年には東広島市立美術館協議会会長に就任され、同年、広島県文化振興ビジョン策定のためのひろしま文化懇話会、同ひろしま文化・芸術懇話会座長代理を務め「21世紀の広島県文化ビジョン」を起草されている。平成10年(1998年)には広島市文化財団評議員(現広島市未来都市創造財団)、平成13年(2001年)には広島県博物館協議会会長に就任されたほか、平成14年(2002年)にはひろしま美術館理事及び企画事業委員会委員長、平成19年(2007年)には国立大学法人広島大学監事、平成22年(2010年)には広島市立大学評価委員、さらに公益法人ひろしま美術館理事、呉市蘭島文化振興財団顧問、蘭島閣美術館名誉館長を歴任されるなど、広島をはじめとする中国地方の高等教育ならびに芸術文化の振興に大きく寄与されてきた。

### 3. 個人的な思い出から

ここで、以下に筆者の目を通して見た先生の姿を描いてみたい。私事に及ぶ話で恐縮ながら、先生との出逢いは1991年に遡る。山口大学を卒業し、広島大学大学院(学校教育研究科美術教育専攻)に進学してしばらくのことであった。当時は、同専攻が置かれたキャンパスはまだ広島市内の東雲にあった。グラウンドを隔てて附属東雲小・中学校があり、猿猴川を北西に望む5階の風通しのよい小さな演習室で美学特論なる講義にはじめて参加したときのことである。窓から入り込む温かく心地よい春風にカーテンが揺らいでいた。先生は当時所属されていた総合科学部から非常勤として講義に来られていた。先輩たちの噂によれば、当該講義はことのほか厳しいことで有名で、最初の数回で参加者が半減する授業であるという。とはいえ、本格的な美学の講義を聴くのは生まれて初めてのことで、多少緊張しながら講義が始まるのを待

った。大学院社会科学研究科国際社会論専攻からも院生が一人聴講に来ていた。ひとまず数名の受講者で講義は始まった。テーマは、近代美学史であった。ダークブラウンのスーツに身を固めた先生の手元には、講義ノートのほか、竹内敏雄編の『美学事典』と何冊かの本が置かれていた。使い込んで黒ずんだその表紙が不思議と印象に残った(後日、早速購入した)。初回はアレクサンダー・ゴットリーブ・バウムガルテン(Alexander Gottlieb Baumgarten, 1714-1762)による『美学(Asthetica)』(1750年)の話で、予備知識らしい予備知識を持ち合わせていなかった筆者は、いきなり飛び出すラテン語と晦渋な内容にかなり戸惑った。それでも、不思議と精神史的な奥行きの高さに独特の魅力を感じ、受講を取りやめようとは思わなかった<sup>(1)</sup>。忘れられないのは、第2回の講義である。テーマは「カントと近代美学」であった。授業の冒頭、唐突に「君、カントの『判断力批判』における美に関する4つの契機について説明したまえ。」と振られた。訳がわからず狼狽していると、一呼吸おいて「君は、ドイツ語は読めるのか。」と聞かれた。もちろん、読めようはずがない。「原文を読んだことがないのか。しかし、翻訳は読んできたらうな。」もちろん、読んでいない。手に取ったことすらなかった。「なら、入門書は読んだな。」否である。とりあえず何も知らないが、ぜひ一度美学というものに触れてみたいと思ったから受講したのである。すると、深いため息をついた後、「君は一体何をしに私の授業に来ているのか。」と一喝された。その時はじめて、講義への臨み方と勉強の仕方に気付かされた気がした。(精神的に)手ぶらで顔を出すべきところではないことが、ようやく理解できた。それから図書館通いが始まった(学校教育学部棟と広島大学附属東雲小学校の間に立つ木造の古ぼけた小さな建物の2階にそれはあった。今はなき懐かしい思い出の場所である)。その後、遅まきながら、ドイツ語の勉強も始めた。こんな話もある。ある授業の冒頭でのことである。先生は導入にあたって、ご自分でお書きになった新しいエッセイを配付され、内容について説明された。その

時、ふと「ラスコリーニコフ的學生が街を徘徊し<sup>(2)</sup>」という一節が目にとまった。よせばよいのについて聞いてしまった。一体「ラスコリーニコフ的學生」とは何のことか。落胆を露わにしながら先生は静かに押し殺すような声で聞かれた。「君はドストエフスキーを読まんのか。」恥を承知でありていへば、それまで全く読んだことがなかった。「一体なんで學生をしているんだ。」とこぼすように嘆息された。もちろん、授業が終わるや否や本屋に急いだことは言うまでもない。そして、今更ながら『罪と罰』を探した。その後も授業の合間に折に触れ読ませていただいたエッセイは、今も不思議と脳裏に残っている。別の論考で出逢った、見るべき眼を養えば「見慣れたものにもエトランジェの風が吹いてくる<sup>(3)</sup>」という一節は、「トランスカルチャー」の理念<sup>(4)</sup>を先取りするものとして、今日に至るまで筆者のインスピレーション源であり続けている。

大学院を修了したのち、さる大学院の博士後期課程を受験したが通らなかった。いよいよ春到来というときに一人途方に暮れていた。そんな矢先、たまたま偶然東雲キャンパスの校舎の入り口でお会いした際、その報告をすると、美学や芸術学を勉強するならウチに来てもらっても構わないとおっしゃってくださった。なるほど、それならと思って、先生の研究室の門戸を叩くことにした。しかし、それがかなり息の長い話になろうとはその時は予想だにしていなかった。「君のことはよく知らないから、まずは研究生をきなさい。それで見極める。」と言われた。1年後、いよいよ博士後期課程を受験しようと思って先生の研究室を訪ねると、今度は「修士課程からやり直すつもりなら面倒を見てもいい。」と言われた。これには流石に動揺が隠せなかった。それまで比較的シンプルな人生設計しか考えたことがなかった。(一浪したとはいえ)学部を卒業し、大学院で箔をつけて就職するといった、漠然としたシンプルなライフ・ステージのイメージしか持ち合わせていなかった。一体どんな人生になるのかとたちまち不安になった。人生の暗雲が立ち込めてくるのを見た気がした。しかし、今更ほかにまともな選

択肢は思いつかなかった。堪忍した。社会科学研究科国際社会論専攻時代は、新しい人生のイニシエーションの期間だった。未熟で不勉強なのは今更仕方ないとはいえ、自分なりに真摯かつ精一杯研究に取り組んでいたつもりではあった。それでも、授業中に素っ頓狂な質問をしてお叱りを受けることも一度ならずあった。そんなある時、先生は筆者を含め何人かの院生を前にこんなことを言い出された。「一生懸命読んではみたが、持っている本の半分も読めなかった、などというのは怠慢だ。」おやおや、お小言だと思った。すると「這いつくばって読んでも、持っている本の十分の一も読めなかったというくらい、本は持っておくものだ。それくらいの旺盛な知的好奇心のない者は、研究者などやめてしまえ。」またもや、眼から鱗であった。おかげで(家族には申し訳ないとは思いつつも)読みもしない本が家中に積み上げられて今日に至っている。

その後、広島芸術学会の活動でお世話になった、市内の美大予備校である「ひろしま美術研究所」代表の大橋啓一先生のお力添えでロータリー財団の奨学金を取得することができ、期せずしてドイツ留学の夢が叶うことになった。1998年のことである。もともと10ヶ月間の奨学金であったが、せっかくドイツまで来て博士論文の資料収集だけして帰国してはもったいないと思い、その後、潔く広島大学大学院を退学して留学先のハンブルク大学の大学院に入り直すことにした。海外で仕事をしながら研究を続けるのは容易ではなく、それだけに時間もかかった。それでも何とか2007年には博士号を取得することができた。その間、先生は広島大学を離れ、本学に着任されていた。留学して最初の7年間は、目の前のことに精一杯で一度も帰国することなく過ごした。初めての帰国の時である。お住まいのある東広島市の西条に先生を訪ねた。先生はわざわざ東広島駅まで自家用車で出迎えてくださった。その足で、移転後の広島大学のメインキャンパスのある西条の、すでに大きく様変わりした街並みなどを見せながら、あちこち連れ歩いてくださった。そして、ちょうど昼食をご馳走になっている時である。ドイ

ツの社会事情や政治情勢についてあれこれ説明している際に話をされた言葉を今も鮮明に覚えている。「どんな人間にも、それぞれに、それなりに居場所のある社会をつくらなければならない。それが政治の究極の課題だ。」慧眼だと思った。折しも、ネオ・リベラリズムの潮流が吹き荒れ、「格差社会<sup>(5)</sup>」が流行語となり、行き場を失った人たちの苦境について語られた時代である。ここで「どんな人間にも」というとき、そこには外国人、海外にルーツを持つ人たち、性的マイノリティー、障がい者はもちろんのこと、この社会に生きる多種多様な人間が含まれるに違いない。それは、表向き「共生」を掲げ、そうした多様性を許容することを謳う社会の裏で、経済的有用性で人を計るようなニヒリズムが横行し、ネオ・リベラリズムの勃興に伴う非寛容の深い闇が拡がりつつある今日、一層重要になりつつある洞察ではないだろうか。いずれにしても、その時点では（まだしばらく後のことになるとはいえ）よもや先生が奉職されていた本学に呼んでいただけることになろうとは思いませんでした。

#### 4. 現象学的美学の彼方へーその遺産

さて、特に美学や哲学を専門とするわけでもない筆者のような人間が先生の業績について語るなど、おそらく身の程知らずも甚だしい、大それた企てであるに違いない。もとよりその内実に適切にコメントするような能力は、はなから持ち合わせてもない。しかしながら、比較的身近にいて、多年に亘ってその薫陶を仰いできた人間の一人として、たとえ半可通の醜態をさらけ出すことに終ろうとも、そしてまた浅学非才との誹りを受けることになろうとも、自分なりに学びとった事柄を書き留めることに罪はないのではないかと考えた。以下は、その無謀な試みの記録である<sup>(6)</sup>。

筆者なりに理解した先生の基本精神とは、端的に言って次のものである。早急に結果や結論に急ぐのではなく、またいたずらに既存の（口当たりの良い流行りの）抽象的な概念を熟知

顔に振り回すのでもなく、丹念に、あくまで個々の、一つ一つの具体的な事象や現象、断片につきつつ、徹してそこに踏みとどまり、そこから本質的な次元に向けて考えようとすること、思考を展開させることである。その精神的態度を「具体性の哲学<sup>(7)</sup>」と呼ぶことが許されるだろうか。それは、2024年に溪水社より上梓された『環境を美学する』の序論<sup>(8)</sup>においても縷説されているように、先生が志された「現象学」の基本姿勢であった。そのスタンスは、一般に「Zu den Sachen selbst!」という標語に体现されているとされる。日本語では「事象そのものへ!」と訳されているものである。さて、現象学の創始者として知られるドイツの哲学者にエドムント・フッサール(Edmund Husserl, 1859-1938)がいる（先生は発音上の近さへのこだわりから、一貫して「フッセル」と表記されている）。そのフッサールが1900年に発表した『論理学研究(Logische Untersuchungen)』に触発されて、ミュンヘンやゲッティンゲンに若い研究者グループが形成される。上記の標語は、すでにその研究者たちにとって「現象のもとにたちどまる」という指針と並んで、指導理念としてあったものだという<sup>(9)</sup>。その後、マルティン・ハイデガー(Martin Heidegger, 1889-1976)の1927年の書『存在と時間(Sein und Zeit)』において、現象学の理念を格率として表したものととして流布されることになる<sup>(10)</sup>のは、周知の通りである。しかし、それを単に一つの定まった標語ないし学問上の枕詞としてやり過ぎたりしないところに金田現象学の骨頂がある。今一度、そこで選ばれている言葉の一つ一つに眼を向け、その本意を汲み尽くそうとするのである。その際、先生はそこで出てくる「Sachen」という単語が複数形になっていることにあえて眼を向ける。「事象」と訳されている語である。それはどうでもよい瑣末なことではなく、事の本質に関わる決定的な問題だという。なぜ「事象」は複数形になっているのか。そして、複数形でなければならないのか。それは、先生によれば「理念に傾斜する抽象名詞(定冠詞単数系)よりも一つ二つと指して数えられる普通名詞(複数形)

を強調したかった」からに他ならない。「Sache」は“suchen”（探す）に由来する裁判用語、一つひとつ裏をとってゆかねばならない具体的物証をさす。探し・捜し出されてくる一見バラバラのモノやコトをたぐって、繋ぎ合わせて事件の核心を解明してゆくことが大切なのだ。その上で、さらに「事象そのものへ！」の「へ」を、抽象的な理念に行き着くことを避けつつ『非方向的』な意味で位置とか手段に近いところで読む」ことを薦める。それゆえ、上記の格率は、その都度その都度の事象から離れず、「一度つかんだモノ・コトは、たとえ片々たるものであっても、こだわりつづけよ！<sup>(11)</sup>」という意味に取るべきだと論じられている。すでにこうしたさりげない一節にさえ、先生の精神的指針は余すところなく現れている。では、なぜそのことにそこまで確信が持てるのか。それについてもフッサールの現象学が導きの糸となっていることが分かる。1996年にPARCO出版から出されたペーター・アンセルム・リードルの書『ヴァシリー・カンディンスキー』の翻訳のあとがき「絵画の文法—内面性のミュートス」では、「本質は現出（Erscheinung）の上方あるいは下方、あるいは彼岸にあるのではなく、現出のまっただなかにある」というフッサールの信念が、さらに一歩踏み込んで次のように読み替えられている。「現出しない本質は考えられない<sup>(12)</sup>」。したがって、どんな小さな断片にも事の本質は表れている、そういうことになる。

ちなみに、先の格率は、1990年に上梓された主著『芸術作品の現象学』の「あとがき」においても言及されている。そこでも「議論がどれほど力をもっているかは、個的な具体的事象にどれほど迫っているかにかかっている」と書かれ、同様に先の複数形の「事象」という問題にも触れつつ、「一枚のタブロオの前に立って、その材質、絵具の重ねかた、筆触、そうしたものを理解や解釈のうちに読み込んでいく方法論を、現象学は提示することができなければならない<sup>(13)</sup>」と述べられている。それゆえ、最初の単著となる1984年『絵画美の構造』の冒頭を飾る序論「絵を読む」において次のようなく

だりを読むとき、改めてその研究が同じ精神によって貫徹されていることを事後的に再確認することになる。曰く、「絵画を読むためには、見ることから感動することへの一足とびの飛躍を断念しなければならない。その意味で読むとは迂遠な回路を自覚的に歩むことを要請する。（中略）絵を読むとは、絵の構造の有意義性に依拠している。たんに描写された内容だけでなく、画面や構図や線や色彩がこの有意義的構造を構成する単位とならなければならない。（中略）絵に関しては、なお美的価値の側面から語られる傾向がある。だが、絵画は有意義的存在である。そのために美的判断をエポケーして、われわれは絵の構造に向かわなければならない<sup>(14)</sup>」。

興味深いのは、そうした先生の基本的なスタンスがすでに早くから紛れもない仕方で現れていることである。1978年（つまり、先生が40歳のとき）に雑誌『思想』に発表された「『現象学的美学』とその現代的意義」という論考がある。それは、ドイツを中心とする19世紀末のドイツの美学・芸術理論の展開に始まり、「現象学的美学（Phänomenologische Ästhetik）」の誕生を経て、直近の1960年代に至る美学思想の動向を振り返りつつ、「現象学的美学」のアクチュアリティについて論じたものである。象徴的なことに、そこでは、1930年代以降1960年代にかけて時代を席卷した、ハイデガーに起因する反美学的な「存在論的芸術理解」の潮流に対して批判的な距離が取られている。ハイデガーおよびその影響下において展開する存在論的芸術論の流れについて、それらが芸術作品を「真理発動の場として特権化する」一方で、「哲学的解釈によって助けられてはじめて理解可能となる暗号」「哲学解釈の素材」にしてしまっていると揶揄される<sup>(15)</sup>。それに対して、「現象学的美学」は「作品がどんな世界を開示しているかによりも、その作品がどのような構造をもっているか」に一貫して関心を寄せてきたことを改めて指摘する<sup>(16)</sup>。その上で、芸術作品を「多層構造」によって構成されるものとして捉え、その構造の解明に尽力したロマン・インガルデン（Roman Witold

Ingarden, 1893-1970) の書『文学的芸術作品』(1931年)をはじめとする、いくつかの代表的な研究に注目する。最後には1970年代以降(まさに執筆当時)本格化する「受容美学」の展開にも目配せをしつつ、芸術作品を、その歴史性も含め、より具体的かつダイナミズムに満ちたものとして捉えうる方法論的なスタンスとして、改めて「現象学的美学」の意義と可能性を確認しようとするのである<sup>(17)</sup>。ここにも「ザッハリヒ (sachlich: 事柄に即した)」な議論を尊ぶ先生のスタンスがよく現れていると言える。

先にも触れたように、先生は2024年に溪水社より『環境を美学する<sup>(18)</sup>』という新たな著作を公にされている。月刊誌『環境ジャーナル』に2013年4月から2023年の3月まで10年間に亘って発表されたコラム120篇を集めたものである。そこには先生がそれまで多年に亘って様々な機会に発表されてきた研究のエッセンスが随所に散りばめられており、その意味で先生の美学に対するスタンスが端的かつ極めて分かりやすい語り口で凝縮された一冊である。それはまた筆者が本学に奉職して以来、折に触れ先生から伺った美学思想の集約でもある。何よりその一篇一篇が先の「現象学的美学」の実践となっている点が肝要である。

本書は、身体が存在を媒介に、時間と空間の両軸において、ある特定の具体的な時代において、かつある特定の具体的な気候的条件、風土、地理的環境、文化的・歴史的なコンテクストに生きて暮らす人間のあり様、しいて言えばその「存在論」を美学の視点から語ろうとしている。その際、その場所に棲み「暮らす」という「生活」の事実性の観点が、極めて重要な眼目をなしている。そこから離れることなく、たえずそこから思考を立ち上げようとする(いつのことか先生がメルロ＝ポンティの「上空飛行的思考」という概念を引き合いに出しながら、その対極にあるような思考態度を批判されていたのを思い出す)。したがって、本書が目指すのは、本文中の言葉で表現するならば、「生活、社会、文化を含めた新しい『人間学

(ジンカンガク)』』ということになる<sup>(19)</sup>。しかも、それは地球温暖化の問題にはじまり、現行の資本主義経済の問題、「持続可能な開発目標 (Sustainable Development Goals: SDGs)」という課題、脱原子力発電、農作物の自給の問題など、現代の差し迫った問題を横軸に、いわゆる「人新世 (Anthropocene)」と呼ばれる地球環境に関する危機的な問題をも正面から受け止めながら語られることになる。それは、一見言葉の響きはよく似ているように見えても、気候など自然環境を含む環境条件を人間の思考形式や感受性と直截に結びつけ、先回りして臆断するような、超歴史的で容易にエッセンシャルリズムに傾きがちな「風土論 (環境決定論)」とは厳しく一線を画すものである。なぜならば、日々の生活の中で、そして歴史の中で営まれる個々の具体的な諸事象との関わりやその歴史的な積み重ねの事実性にどこまでもこだわろうとするからである。性急に体系化に走らない理由もそこにある。「暮らし (生活)」という視点を根底に据え、そこを基点に考えるからこそ、「私たちの」というパブリックに関する議論<sup>(20)</sup>も当然出てくることになる。市民社会的な視点である。それはおそらく、昨今注目を集めている「コモン (Common)」の思想<sup>(21)</sup>の議論とも通底してくるに違いない。したがってそれは、たとえばある種の保守政党が振り回すような排外主義的で「民族」主義的なネオ・ナショナリズムとも毅然と袂を分つものである。むしろ、そこに住んで暮らす全ての者に等しく関わる共通の問題として、おのずと多元性市民社会における公共性と共同性という次元が開かれてくることになる。そして、それは決して歴史性を重視することとも矛盾しないのである。こうして読み進むうちに、一つ一つのコラムが一貫して読み手の生き方や責任意識に訴えかけつつ、かつ「アンガジュマン (engagement) (参加) を要請していることに気づくことになる。理解されるべきは、「環境は外にあるのではない。わたしが環境であり、環境がわたしである<sup>(22)</sup>」ということなのである。

本書のタイトルにある「美学する」というあまり聞き慣れない表現、その背景には20世紀

の現象学運動の基調の一つをなす「身体性」への関心があった。そこでは、まず古代ギリシア語にみられた「中動態」という、能動態と受動態に並ぶ（その間に立つ）第三の様態に目が向けられる。先生はそこに「感じる」という人間の活動を正面に据えて考察する美学のアプローチの根本的なあり方を見て取られている。そこからおのずとその活動の中心的な場としての「身体」がクローズアップされ、また必然的に「環境」と「身体」との相関関係もテーマとして浮かび上がってくることになる<sup>(23)</sup>。その上で次のように書かれる。「現象を『現れたもの』と名詞としてとらえるかぎり、それは物の部分的な一面、一様相にすぎない。だが、『現れる』と動詞化してみよう。『現れる』は一つのモノの面を超えて、『かくれる』と相関しながら、現れ—匿れるダイナミックな全体的様相を見せはじめる<sup>(24)</sup>」。こうして個々の「現象」は、身体を介在させつつ、「環境」をも取り込み、さらに歴史的・時間的な地平に向かって開かれていくものとなる。無論、こうして語られることになる「環境美学」は、決して環境についての単なる思弁に終わってはならないはずである。その営みは、同時に感性の問題を通して自覚と行いにも働きかけるのでなくてはならない。その意味で認識は「行為」として生起しなければならない。その意味でもやはり、動詞で語られなければならないのであろう。本書を読んだある美学者が（おそらく世代の共感をもって）「学生運動の匂いがする」と評したという話を先生から伺ったが、その意味で、必ずしも穿った見方ではない気がした。

ところで、その120篇におよぶ論考の中にも、いくつかの基軸となる論点があることに気づかされる。その最も大きなものの一つが「暦」と人間の生活の関わりをめぐる考察である。より正確には、「暦」を媒介とする人間の時間意識とそれが織りなす文化についての分析と洞察である。本書の中には直裁に「現代暦学への視座」と銘打たれた2篇のコラム<sup>(25)</sup>がそのために立てられているが、それだけにとどまらず、人間が生きる上で「暦」という循環的な時間意識が持つ意味や、それによって育まれる人々の

価値観、とりわけ自然観や世界観などをめぐる考察は、本書全体を通して随所に散りばめてある<sup>(26)</sup>。むしろ、その一つ一つが相互に響き合い、その思考は深まっていく。そんな構成になっている。誌面の都合上、ここでその議論の一つ一つに立ち入ることはできないが、こうした議論が各々のページでその都度個々の具体的な事象に即して論じられていることは言うまでもない<sup>(27)</sup>。その際、考察の起点となるのは次の歴史的事件である。明治6年（1873年）に十分な議論もないまま、当時の政府の都合で半ば強引に導入された「グレゴリオ暦」による改暦である。それは、単に多くの混乱を日本社会に引き起こしたのみならず、何より日本人の時間意識や季節感を混乱させることになった。それまで旧暦（とりわけ太陰太陽暦としての「天保暦」）のもとで培われてきた文化行事や慣習の多くが、約1ヶ月のずれとともにそのまま新暦に移され踏襲されてしまったことで、個々の営みが結びついていたそれぞれの季節の気候条件や現象と切り離され、本来の意味や感覚や感受性が伝わらなくなってしまった。古代以来培われてきた、この国の風土や気候、季節ごとの天候、稲作を中心とした生活様式やそのリズムに裏付けられた文化や習慣、感受性の持つ、それ自体本来極めて「理に適った」無理のない自然なあり方との間に断絶を引き起こしてしまったのである。当然、そこに根ざしつつ育まれた明治以前の文学作品や芸術作品なども正確に理解することが難しくなってしまった。にもかかわらず、今や多くの人がそのことにさして疑問すら感じないで暮らしている。この性急な近代化＝西洋化政策（別のところでは「脱亜入欧の拙速にすぎない改暦<sup>(28)</sup>」と揶揄される）がもたらした負の遺産を是正すべく、それによって歪曲されてしまった時間の意識を指摘し、旧暦に基づく本来の感受性を、今一度歴史の中から解きほぐし、意識にもたらそうと本書は試みる。このいわば「生きられた」時間の意識を取り戻し、改めてこの風土において生み出された文化や人々の営みの豊かさ、美意識を実感する道を示そうとするのである。「旧暦併用のススメ」もそうした中で提起される<sup>(29)</sup>。しかし、それ

だけにとどまるものではない。本書は、そこからもう一步踏み込んで、「暦」に体现される「循環の思想」を、産業革命以降世界を覆い尽くした「直線的時間のニヒリズムを救う」ものとして示そうとすらすら<sup>(30)</sup>。そんな「暦（旧暦）」に対する先生の関心について、本書に先立って2013年（つまり本コラムの連載が始まる年）にテレビ新広島（TSS）の文化大学一般教養講座の枠組みで行われた講演「旧暦の美学—生活とカレンダー—」の締めくくの一節が極意をなしている。そこでは、自身が学生時代を過ごした1960年代に若者たちの心を捉えた「死を決意して投企する」「実存主義的時間論」に対し、より「豊かな時間」を構想しつつ次のように述べられる。「自然の共生する意識の時間とはそういう時間でした。その具体的な場面として、私は暦に出会いました。暦は制度であり、国家統治や政治や経済や長い惰性的な習慣など、非美的な要素がいっぱいまとわりついていました。だがむしろそうだからこそ生き生きとした時間意識が内包されているのではないか<sup>(31)</sup>」。ここでポイントとなるのは、旧暦の時間意識が「個人」を超えた、歴史上無数の人々の生活の営みを通して支えられ、その都度の修正を通して発展させられ、連綿と受け継がれた、人間的経験によって裏打ちされた文化的形成物であるということにある。狭義の政治イデオロギーを超えた、ある意味で文字通り「生きられた」文化と生活の結晶なのである。本書は、そうした「暦」を美学的な視点から（あるいはより広い意味での「感性論的」な視点から）豊かに論じ尽くそうとする。

「暦法的時間論」（ポール・リクール）に関する考察に哲学的な基礎付けを施すべく執筆され、発表された2021年の論考「星座と器—暦法の原イメージ」のあとがきによれば、先生がそうした問題に関心を持たれるようになったのは、還暦を迎える少し前からだという。ということは、1998年前後ということになるだろうか。最初の奉職校であった広島大学を退官される頃の話である。その頃から「日本の美学」の問題を考えるようになり、『古事記』や『日本書紀』、『出雲風土記』や、何より「暦の宝庫」たる

『万葉集』を読み返すうちに、「暦」の問題を本格的に美学の問題として考えるようになったというのである<sup>(32)</sup>。実際、公にされた比較的初期のテキストとしては、たとえば広島芸術専門学校の主催で2005年に行われた連続講義を本としてまとめた『美学の未来』の第2回講義「時間の想像力<sup>(33)</sup>」がある。その後、度々講演や新聞のコラムを通して論じられることになる<sup>(34)</sup>。

しかし、その一方で、筆者にはもう一つの契機があるように思えてならない。1987年、金田先生は今道友信編集の『西洋美学のエッセンス 西洋美学理論の歴史と展開』（ペリかん社）においてハイデガーについての論考を発表されている<sup>(35)</sup>。タイトルからすると、ハイデガーの芸術論の中核をなす1935年の『芸術作品の起源』の解説・注釈を想像してしまうが、それはもちろんのことながら、本論考では、ハイデガーの美学や芸術についての関わりや考察を何よりその生涯の思想の営みの中から汲み取ろうとするところにその要諦がある。ここで興味深いのは、その中で芸術論には一見関係のなさそうにみえる1933年秋にベルリンでなされたラジオ講演「創造的風景—なぜ私は田舎に留まるか—<sup>(36)</sup>」がハイデガーの「芸術作品観の原風景」として取り上げられていることである。これはハイデガーの「転回」を告げるテキスト、後期のハイデガーの思索の「原形質」が語られているとも言われる論考である<sup>(37)</sup>。その説明のために異例の行数が割かれている。この講演には、「対象化しつつ体験することではなく、そのもとに滞留すること、もしくは住むこと<sup>(38)</sup>」を説くという意味で、主観の「体験」をベースに語られる近代の美学の超克を企図し、そこから距離をとって独自のスタンスを打ち出そうとする、ハイデガーの芸術論の基調がすでに萌芽的に現れているというのである。この中でハイデガーは、自らの哲学の思索をフランスとの国境地帯にあるドイツ南西部の山岳部シュヴァルツヴァルトの農夫の営みと同等のものとなし、近代化の象徴たる大都市の喧騒にではなく、むしろ数世紀におよぶ直向きの営みに支えられたシュヴァルツヴァルトの人々の「Boden-

ständigkeit」から自らの思索は生まれていると語る。この語は、日常語では「郷土に根付いた、地に足のついた、堅実な、素朴で飾り気のない」といった意味で使われる極々一般的な形容詞「bodenständig」の名詞形である。先生はこれを「土着性<sup>(39)</sup>」と訳されている。その上でここでの議論について「ヨーロッパの伝統的形而上学を底流するニヒリズムが、ここでは土着性の信頼によって克服されようとしている」と書かれる。この箇所には筆者は、先生の特別な思い入れを感じてやまない。ここに、「暦」の循環的な時間意識を通して、(特に日本の文脈の場合「旧暦」のリズムに裏付けられた文化に信頼を寄せることで)近代のニヒリズムを克服しようとする先生の見論に通底する精神的なスタンスを見て取るのは果たして邪道であろうか。さらには、1975年に購入されたというお住まいの黒瀬の休耕田を利用しての多年に亘る畑仕事(野菜栽培)への従事にも、ここに通じる想いがあると読むのは筆者の浅はかな深読みなのであろうか。

かつて明治の文豪夏目漱石は、大正3年(1914年)に学習院で行った講演「私の個人主義」の中で、過去の自分への自戒の念もこめつつ、もっぱら西洋の思想や文化の潮流を追いかけ紹介することに血道をあげる日本の知識人の屈折したあり方を「他人本位」と呼んで痛烈に批判した。そして、その上で「世界に共通な正直という徳義を重んずる点から」自己の捉え方や感じ方を堅持することを説いた<sup>(40)</sup>。しかし、金田先生の研究は、そうした偏向とは無縁である。多年に亘って現象学的美学の研究に従事された先生は、それを自家薬籠中の物とする中で、やがて「暦」(とりわけ「旧暦」)の問題と

の取り組みを通じ、その都度ある特定の地において生きる人間に固有の「環境」との関わり方とそこから生じる感受性の問題に目を向け、そこから思考を立ち上げ、洋の東西における歴史的な議論をも閲しつつ、「暦」(カレンダー)に結晶化された循環的な時間意識の人間学的な意義という普遍的な次元に議論を広げられていった。それは先生の考えられている現象学の精神に忠実であるばかりか、まさに知識人たるものの面目躍如ともなっていると思われる。来年には、さらに次なる書『暦(旧暦)の美学』の出版が控えていると小耳に挟んだ。米寿を超えてなお衰えることなく忌むこともなく果敢に学的探求を続ける美学者の背中に学ぶものは少なくない。

## 5. おわりに

東亜大学大学院デザイン専攻や芸術学部において、私たちは多年に亘り、先生の深い学識とご経験に裏づけられた巨視的な観点から、研究活動や研究指導、日々の教育活動の様々な場面で、多くの貴重な示唆や助言、励ましの言葉をいただいていた。それは、そこに働く教員や職員にとって大きな精神的支えとなると同時に、導きの糸ともなってきた。先生が折に触れ、こうしたあちらこちらで落とされてきた思索の「雫」がさまざまな波紋を呼び起こしつつある。とはいえ、それは、その教えをそのままに受け取るということでは恐らくない。その波紋に共鳴して、別のものがそれぞれの仕方で新たに鳴り始める。それが人間の精神的な営みの本来のあり方ではないか。こうしてさらなる新しい波紋が広がっていく。それは、この下関においてもまた同様なのである。

## 註

(1) 以来、先生の語られる思想や思考の精神的な奥行きの高さには絶えず魅了されてきた。「何となく…」という思考などない。人間の思考は、決して抽象的で宙に浮いて漠としたものではなく、それ自体具体的な

歴史の状況と文化の中で起こった事実性の世界なのであり、またそのようなものとして存在する。それゆえ、その都度具体的な現実世界の出来事や情勢、環境との呼応関係の中に捉えて語ることのできる側面が必

- ずあるはずである。その一方で、それらは相互にダイナミックなコンステレーション（星座）を成してもいる。常々そうした想いを抱かされたのを覚えている。
- (2) 恥ずかしながら典拠不明である。先生が書かれた著作や学術論文は、科学技術振興機構知識基盤情報部のデータベースである「researchmap」や国立情報学研究所の学術情報ナビゲータ「CiNii」で概ね確認できるが、そこには夥しいエッセイや講演原稿、新聞の記事や雑誌のコラムなどはほとんど含まれていない。
  - (3) 同上。
  - (4) 本概念については、たとえば、以下の抽稿を参照のこと。清永修全「哲学者ヴォルフガング・ヴェルシュとの対話（後編）—芸術教育をめぐる—」『東亜大学紀要』第35巻（2022）pp. 41-67, 特に pp. 47-52. 詳細に関してはヴォルフガング・ヴェルシュ自身による以下の著作がことのほか有益である。Wolfgang Welsch: *Transkulturalität. Realität-Geschichte-Aufgabe*, Wien 2017.
  - (5) それからしばらくした2006年に流行語の一つとなっている。「格差社会」『フリー百科事典 ウィキペディア日本語版』, URL: <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%A0%BC%E5%B7%AE%E7%A4%BE%E4%BC%9A> [閲覧：2025年11月28日]
  - (6) その意味で、本稿は金田先生のこれまでの業績全体を満遍なくバランスをとりながら説明するような大それたことは全く意図していない。したがって、その業績の中核を占める、本来であれば真っ先に取り上げるべきフッサールの想像力論の解明をはじめとする一連の美学理論にも全く立ち入っていない。ご寛恕いただきたい。
  - (7) 実際、かつてこの言葉は、先生にとっての「美学」そのものの存在意義を表現したものであるとして使われたことがある。金田晉「現象学的美学」『AERA Mook 哲学がわかる。』朝日新聞社（1995）p. 54. そこでは続けてこう書かれている。「抽象的に思考するよりも、物に即していつもそこに立ち戻りながら思考するほうが性に合っていた。」
  - (8) 金田晉『環境を美学する』溪水社（2024）pp. 1-6.
  - (9) 金田晉「『現象学的美学』とその現代的意義」『思想（第652号）』岩波書店（1978）pp. 196-197.
  - (10) マルティン・ハイデガー『存在と時間（上）』（細谷貞雄訳）筑摩書房（1994）p. 78.
  - (11) 金田『環境を美学する』pp. 4-5.
  - (12) 金田晉「絵画の文法—内面性のミュートス」, ペーター・アンセルム・リードル『ヴァシリー・カンディンスキー』（金田晉・森秀樹訳）株式会社PARCO出版（1996）pp. 188-193, ここでは p. 190.
  - (13) 金田晉『芸術作品の現象学』世界書院（1991, 初版1990）p. 332.
  - (14) 金田晉「序—絵を読む」『絵画美の構造』勁草書房（1984）p. 7 および p. 10.
  - (15) 金田晉「『現象学的美学』とその現代的意義」p. 204.
  - (16) 前掲論文, p. 207.
  - (17) その意味ではその末文にも書かれているように、当該論考は、内容上、1984年に出版された今道友信の編集による『講座美学 第3巻 美学の方法』に書かれた論文「現象学」と補い合うものとなっている。後者では、あえて現象学の創設者であるフッサールに立ち戻り、それまで十分に顧みてこられなかったその芸術論・美学論を残された草稿をもとに丹念に復元・再構成し、改めて美学史の文脈に位置付け、その現代性を説く労作である。金田晉「現象学」『講座美学 第3巻 美学の方法』（今道友信編）東京大学出版会（1991, 初版1984）pp. 33-59. ちなみに、前者はタイトルを変更の上『芸術作品の現象学』の第4章として所収。また、後者は、内容上、同書の第3章と重なる部分が多いように思われる。また、その雛形としては、先の1984年の『絵画美の構造』の第1章2節

が該当するように思われる。

- (18) 本書についてのバランスの取れた紹介と分析として、気鋭の美学者による以下の書評がある。桑島秀樹「書評 金田晋著『環境を美学する』』『美學』(265号75巻2号)美学会編(2024) pp. 125-126. 桑島の書評は、本書を「環境が生んだ日本等の美—中国山地のタタラ製鉄」「環境としての東アジア、環日本海諸国—『対馬アート・ファンタジア』」「東アジアの『旧暦の美学』確立に向けて」という3つの観点からまとめて分析している。「現象学的知見に裏打ちされた言葉が散りばめられた本コラム集」というその洞察には、肯首あるのみである。
- (19) 金田『環境を美学する』p. 29.
- (20) たとえば同書 p. 29, 79.
- (21) 本テーマについては、たとえば以下のネット記事を参照のこと。内田樹・斎藤幸平「『人新世』の人類滅亡危機にマルクス経済学が必要になる理由」(週刊朝日) AERA Digital (2021年1月3日), URL: <https://dot.asahi.com/articles/-/79431?page=1> [閲覧: 2025年12月7日]
- (22) 金田『環境を美学する』p. 19.
- (23) 同書 p. 2.
- (24) 同書 p. 3. そこにはこうも書かれている。「動詞化して考える、それは美学を現象学の立場から研究するわたしの姿勢でもあった。」
- (25) 同書 pp. 188-189 および pp. 190-191.
- (26) ざっと目を通すだけでも以下の箇所における直接的な言及が見られる。pp. 23-27, 38-39, 48-49, 116-117, 146-147, 154-155, 160-161, 169-171, 181-183, 186-191, 194, 210-211, 222-223, 248-249, 250, 254-255, 259, 266-267, 274-276.
- (27) 本書でも極めて多様な現象が言及されているが、より詳細で立ち入った議論としては、2013年にTSS文化大学一般教養講座の枠組みで行われた講演「旧暦の美学—生活とカレンダー」で論じられている清少納言による『枕草子』の冒頭の句の分析、「正月七日」, 「五月五日(端午の節句)」, 「七月七日」, 与謝蕪村の俳句の解釈, 元禄15年12月14日の赤穂浪士による討ち入りの状況解釈など、さらには2019年に旧制堺中学校および府立三国丘高校の同窓会の主催する三丘アカシアトークカフェでの講演「旧暦の美学」における酒井抱一の「夏秋草図屏風」の読解がとりわけ珠玉である。金田晋「旧暦の美学—生活とカレンダー」, URL: <https://masters.hiroshima-u.ac.jp/TSS-gakumon-sanpo/25-1-kanata.pdf>. [閲覧: 2025年12月3日] および金田晋「旧暦の美学」(三丘アカシアトークカフェ 第3回)(2019), URL: [https://home.hiroshima-u.ac.jp/nharano/KanataKyurekinobigaku.pdf?fbclid=IwAR1vJy1gpMJQAEXH4iCRI8Nz2AU-ShI8Z3Jdes\\_BSfzz2SFX7xsYiLEvH6I](https://home.hiroshima-u.ac.jp/nharano/KanataKyurekinobigaku.pdf?fbclid=IwAR1vJy1gpMJQAEXH4iCRI8Nz2AU-ShI8Z3Jdes_BSfzz2SFX7xsYiLEvH6I) [閲覧: 2025年12月6日]
- (28) 金田晋『美学の将来』広島芸術専門学校(2006) p. 25. ちなみに2013年の講演「旧暦の美学—生活とカレンダー」では端的に次のようにまとめられている。「明治政府の近視眼的『脱亜入欧』によって、私たちの季節感、自然感がガタガタになってしまいました。生活や文化の面で、重大な齟齬をきたし、それが140年以上経った今も引きずっています。改暦以前の、日本の文芸、生活行事、歴史等がすぐには理解できなくなりました。」金田「旧暦の美学—生活とカレンダー」, p. 10.
- (29) 本書はいかなる意味でも復古主義に立つものではない。近代の遺産とその恩恵を捨てるとは主張していない。あくまで旧暦が持っていた意義を忘れず意識化できるよう、そしてその伝統も合わせて生きることができるよう努めようというのが趣旨である。
- (30) 金田『環境を美学する』pp. 234-235. 他のところではこうも書かれる。太陽太陰暦と同じルーツを持つ「星座的思考を学ぶこと」によって、近代科学技術の陥った陥穽か

ら脱出を図ること」。もちろん、これはそのまま歴的な時間意識にも当てはまるであろう。金田晉「星座と器—暦法の原イメージ」『梅原日本学の源流』（小川侃編）京都大学学術出版会（2021）p. 140.

- (31) 金田「旧暦の美学—生活とカレンダー」, p. 15.
- (32) 金田「星座と器—暦法の原イメージ」 p. 142.
- (33) 金田『美学の将来』pp. 24-26. 同書は裏書きに限定 100 部のみでの発行とある。いかにも惜しいと言わざるを得ない。公共性の問題、身体と環境、風土とテクノロジー、メタファーや遊びの問題など、アクチュアルな議論を横断しながら生き生きとした口調で語られる美学の諸相。ぜひ「現代美学へのいざない」として再出版することを一読者として願う次第である。
- (34) 筆者の手元にあるものだけでも以下の記事がある。金田晉「旧暦で、月の情景を取り戻そう」 広大マスターズ「学びの窓」（2017年12月14日），URL: [https://hirodaimasters.web.fc2.com/mado/mado\\_kanata3.pdf](https://hirodaimasters.web.fc2.com/mado/mado_kanata3.pdf) [閲覧：2025年12月6日]，金田晉「そこが聞きたい 旧暦併用のススメ」『毎日新聞』（2018年2月12日），URL: <https://home.hiroshima-u.ac.jp/nharano/KanataKyuureki.jpg> [閲覧：2025年12月6日]，金田晉「旧暦と併用なら四季と結び付く」『中日新聞』

- （2018年2月14日夕刊，『東京新聞』2018年9月15日朝刊，『北陸中日新聞』2018年9月15日朝刊），URL: [https://hirodaimasters.web.fc2.com/kaiin\\_shiryo/shiryo\\_kanata3.pdf](https://hirodaimasters.web.fc2.com/kaiin_shiryo/shiryo_kanata3.pdf) [閲覧：2025年12月6日]，金田晉「旧暦併用のススメ 季節感を取り戻そう」FM 東広島ラジオ講座「学びの時間」（2018年11月），URL: <https://masters.hiroshima-u.ac.jp/oz/manabi-jikan-18-4-kanata.pdf> [閲覧：2025年12月6日]，金田晉「月の暦とエネルギー」『中国新聞』（2021年5月5日）
- (35) 金田晉「ハイデガー」『西洋美学のエッセンス 西洋美学理論の歴史と展開』（今道友信編）ベリカン社（1990，初版1987）pp. 279-296.
- (36) ここでは以下の邦訳を参照している。マルティン・ハイデッガー「なぜわれらは田舎に留まるか？」（矢代梓訳）『30年代の危機と哲学』（M・ハイデッガーほか，清水多吉・手川誠士郎編訳）平凡社（2009）pp. 127-137.
- (37) 矢代梓「解題」『30年代の危機と哲学』 p. 136.
- (38) 金田「ハイデガー」 p. 286.
- (39) ちなみに矢代訳では「郷土の固有性」となっている。ハイデッガー「なぜわれらは田舎に留まるか？」 p. 130.
- (40) 夏目漱石『私の個人主義』講談社（2022）特に pp. 134-135.

< Reports / Records >

Susumu Kanata, Prof. em., Prof. h.c. , Dr., Toua-Universität, zu Ehren

Nobumasa KIYONAGA

Universität Toua, Fach Kunst, Kunst und Design Fakultät  
e-mail : kiyonaga@toua-u.ac.jp

Abstract

Dieser Text wurde zu Ehren von Prof. em., Prof. h.c. Dr. Susumu Kanata geschrieben. Er ist einer Persönlichkeit gewidmet, die sich seit 2001 unermüdlich für die Entwicklung der Toua-Universität, insbesondere der Graduiertenabteilung sowie des Fachbereichs Kunst, eingesetzt hat. Dafür wurde Prof. Kanata am 21. Mai der Titel Professor honoris causa verliehen.

Keywords: Susumu Kanata, Toua-Universität, Graduiertenabteilung, Universität Hiroshima, Ästhetik, Phänomenologische Ästhetik, Umwelt, Kalender